

広島大学平和科学研究センター

Newsletter

2015年



〒730-0053 広島市中区東千田町 1-1-89

tel: 082-542-6975 fax: 082-245-0585

email: heiwa@hiroshima-u.ac.jp

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/heiwa>



就任一年を振り返って

広島大学平和科学研究センター長

(前国際連合日本政府代表部 特命全権大使)

西田 恒夫

2014年度は、センターにとり記念すべき重要な年となりました。

昨年4月に、私がセンター長に就任し、新しい仲間を迎え、センター再出発の第一年を所期の成果を上げて終えることが出来ました。昨年のご挨拶の時に述べましたように、センターの当面の活動を、1. 国内外に亘る、ネットワーク作りと、2. 地域に開いたセンターの立ち上げに、主眼を置き、もって、センター自身の存在感の向上と、「平和学」を追求することを通じ、拠点たる広島大学の世界的発信力の強化に貢献することに努めてまいりました。その結果、これまでの実績を踏まえつつ、新たに、米国、欧州、豪、東南アジア諸国の大学、研究所、社会活動団体など幅広い関係者との間に、新たなパートナーシップ樹立の端緒を開くことが出来ました。

また、研究会についても、国際政治、教育、環境など広い視点から、これからの「平和学」の可能性を探訪する努力を払いました。加えて、昨年11月には、内外の一流の識者の参加を得て、広島国際会議場において「混沌とする世界における国際機関の強化」との主題の下、国際シンポジウムを開催いたしました。現下の国際情勢の分析を踏まえ、国連をはじめとする国際機関の今後の役割はどこにあるのか、過去の実績と将来の課題を見据えて、いかにして、国際機関を強化したら良いのかについて、多岐にわたる視点から、突っ込んだ議論が行われました。また、その文脈において、ヒロシマの役割は何かについても、貴重な意見交換がなされました。おかげさまで、多数の市民の皆さんにご参加いただき、マスコミを通じて、広く報道されることとなりました。被爆70年にあたる、2015年におきましては、かかる昨年の実績をしっかりと踏まえて、さらに活動を一層強化発展し

てまいる所存です。

国際シンポジウムとしては、来る 7 月 28 日に同じく国際会議場において、「恒久的な平和への取組みと市民社会の可能性—核廃絶に向けた 70 年の軌跡と今後」として、なぜ、核兵器廃絶は遅々として進まないのか、現実政治の制約はどこにあるのかについて改めて、レビューを試み、さらに、議論のスコープを広げて、少しでもより平和な国際社会を作るためにヒロシマを始めとする市民社会は何をすべきであるのかについて、自由闊達な議論を展開いたしたいと希望しています。市民の皆様におかれては、昨年引き続き、多数の方にご参加の上、貴重なご意見を頂けることを心から願っております。

ネパールの悲惨な大地震、3.11 を体験した我々日本人にとっては特に、思いは、強く、深いものがあります。国際社会の支援は重要ですが、失ったものは、二度と戻ってくることはありません。ISIS の傍若無人の非道は、収まるどころか、諸国の国境を越えて、殺戮を繰り返しています。シリアを始め紛争国から愛する家族を守るために、国を逃れる多数の難民がそれを食い物にする犯罪者の犠牲となり、海で、陸でその絶望的な夢を無残に奪われています。空しいものがあります。しかし、だからといって、一国平和主義に逃げ込むことは出来ないし、許されるものではありません。

広島大学は、スーパーグローバル大学に選ばれました。越智新学長も就任しました。

平和科学研究センターは、学内の英知を結集して、「平和の大学、広大」の推進のため努力いたします。

2015 年 5 月

2014 年度平和科学研究センター活動

シンポジウム

○平和科学研究センター／新潟県立大学共催国際シンポジウム

「混沌とする世界における国際機関の強化—ヒロシマの果たす役割は—」

(2014 年 11 月 21 日) 広島国際会議場ダリアの間にて開催

< 第 I 部 戦後国際関係に果たした国際機関の役割 >

G. John Ikenberry (プリンストン大学教授)

天野万利(アジア生産性機構事務局長／前軍縮会議日本政府代表部 特命全権大使)

猪口孝(新潟県立大学学長)

<第Ⅱ部 混沌とする世界における国際機関の強化>

David Held (ダラム大学教授)

弓削昭子 (法政大学教授/元 UNDP 駐日代表・総裁特別顧問)

西田恒夫 (平和科学研究センター長/前国際連合日本政府代表部 特命全権大使)

<基調講演>

明石康 (公益財団法人国際文化会館理事長/元国際連合事務次長)

<第Ⅲ部 ヒロシマは何ができるのか?>

Brian Finlay (ヘンリースティムソンセンター上席研究員)

水本和実 (広島市立大学広島平和研究所副所長・教授)

山本武彦 (早稲田大学名誉教授)

川野徳幸 (平和科学研究センター教授)

○第 40 回広島大学平和科学シンポジウム

「次世代にどのように未来を引き継いでいくか

～持続可能な開発のための教育 (ESD) の観点から～」

(2015 年 2 月 4 日) 広島大学東千田キャンパスにて開催

木曾功 (平和科学研究センター特任教授/

内閣官房参与、前ユネスコ日本政府代表部 特命全権大使)

「ESD の 10 年の取組みとこれから」

中山修一 (広島大学名誉教授)

「韓国と広島での ESD の実践」

研究会

第 197 回研究会 (2014 年 6 月 16 日)

菅野哲 (福島県飯舘村住民/元飯舘村役場参事兼課長)

「飯舘村民の現状、そしてこれから」

第 198 回研究会 (2014 年 6 月 30 日)

今中哲二 (京都大学原子炉実験所 助教)

「チェルノブイリとフクシマ～放射能汚染と向き合うためには～」

第 199 回研究会 (2014 年 8 月 4 日)

開沼博 (福島大学うつくしまふくしま未来支援センター 特任研究員)

「歴史的危機に学問はいかに向き合うべきか：福島学構築プロジェクトの実践から」

第 200 回研究会 (2014 年 11 月 22 日)

(公益社団法人日本マレーシア協会、中国放送との共催)

「ESD の 10 年の取組み」

<基調講演> 三宅博之 (北九州市立大学法学部政策科学科教授)

「ESD の 10 年と北九州市の取組み」

<事例紹介> 小倉亜紗美 (平和科学研究センター 助教)

「広島地区の ESD の取組みと平和学」

<事例紹介>青山秀雄（広島県環境保全アドバイザー）

「マレーシア・サラワク州での ESD 活動に参加して」

第 201 回研究会（2015 年 1 月 23 日）

藤本穰彦（静岡大学 特任准教授）

「足元からつくる平和－地域開発と環境からのアプローチ」

第 202 回研究会（2015 年 3 月 19 日）

佐藤尚平（金沢大学人間社会研究域法学系 准教授）

「現代中東情勢とイギリス帝国の遺産」

出版物

○『広島平和科学』（第 36 号、2015 年 3 月）

○研究報告シリーズ（和文）

No.50 塩崎洋一・淵ノ上英樹

『津波対策として議論された臼杵小学校移転統合問題における PTA および
地域住民としての取り組みについて』

No.51 平和科学研究センター（編）

『広島大学平和科学研究センター/新潟県立大学共催国際シンポジウム
混沌とする世界における国際機関の強化－ヒロシマの果たす役割は－』

外部資金等受入状況（2014 年度）

<公益財団法人村田学術振興財団>

研究代表者：友次晋介

応募分野：平成 26 年度 研究者海外派遣援助

研究課題：脱植民地化と英国の対中東原子力協力

補助金額：220,000 円

2014 年度受賞

川野徳幸：第 13 回（平成 26 年度）広島大学長表彰（大学改革の推進等）

小倉亜紗美：平成 26 年度広島大学女性研究者奨励賞受賞（268,000 円）

外部資金等受入状況（2015 年度）

<科学研究費補助金>

研究代表者：川野徳幸

応募分野：平成 27-30 年度科学研究費補助金基盤研究（B）

研究課題：被ばく被害の国際比較研究：セミパラチンスク、チェルノブイリ、広島・長
崎、福島

補助金額：14,010,000 円（H27-30 年度総額）